



Title	第1章 アイヌの家族形成
Author(s)	品川, ひろみ
Citation	「調査と社会理論」研究報告書, 30, 17-29
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/52412
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_30_1.pdf



第1章 アイヌの家族形成

品川ひろみ | 札幌国際大学短期大学部教授

はじめに

アイヌの血筋は、和人との結婚が進み、次第に薄まっているといわれている。それは結婚の際にアイヌの身体的特徴を目立たなくするため、あえて和人を選んだというアイヌ自身の戦略によるものでもあり、その結果、アイヌの混血が進んできたといえる（小内 2012）。

今回の対象地域である新ひだか町は、アイヌ民族にとって歴史ある重要な地域である。この地においてもアイヌの人々の血筋や意識は、他の地域と同様な傾向にあるのだろうか。

本章ではアイヌの人々が、その血筋をどのように受け継いできたのか。つまり、どのような家族に生まれ育ち、新しく家族を形成し、次の世代へとつなげていったのかを明らかにする。具体的には、本人とその親や配偶者の血筋を確認したのち、アイヌの血筋であることをどのように意識したのか、さらに結婚の際にアイヌであることは影響したか、子どもへの民族性をどう育てたいかについて、年齢層に着目しながら分析をすすめる。

また、その際には、当地域におけるアイヌの人々の特性を明らかにするため、2009年に札幌とむかわで行ったアイヌ民族生活実態調査の結果を参考にする¹⁾。

第1節 調査対象者の生活

第1項 婚姻と家族の状況

本章で分析の対象とするのは、インタビューに答えてくれた57人のアイヌの人々である。その内訳は、20代、30代の青年層が9人、30代、40代の壮年層が26人、60代以上の老年層は22人であった。男女別では男性27人、女性30人となっている。また、壮年層の3人、老年層の2人が和人である。

対象者の婚姻と世帯の状況についてみると、青年層9人のうち、未婚は2人、既婚が6人、離別が1人となっていた。現在の生活は、2人の未婚者も、親やきょうだいと生活するなど、すべての者が家族と同居しており、1人暮らしは見られなかった。また4人家族以上の世帯が6人と、家族規模が大きいことが確認された。

1人暮らしがみられなかった青年層に対して、壮年層は1人暮らしが6人ほどみられた。また、2人暮らしというのも8人と世帯の規模が青年層に比べ小さいケースが多い。これは子どもが成長し進学や就職のため地元を離れてしまい、夫婦2人暮らしになったというケースが影響している。一方で、子どもが多く、さらに親と同居しているため5人以上の家族もあるなど、家族の規模に開きがあった。

老年層になると1人暮らしが5人と、壮年層以上に世帯規模が小さくなっている。これは年齢が高くなることで子どもが成長し家を離れることに加え、配偶者との離別や死別が影響していると考え

えられる。

つぎに家族の生活を支えている現在の職業についてみてみよう。青年層では牧場関係、公務員、自由業など多彩である。無職が4例と多いのは、母子家庭であるのと、専業主婦であるためである。

壮年層の26例では、青年層以上に多様な職種がみられた。しかし、いわゆるホワイトカラーの職についている者は5人だけであり、農業、建設、土木、運輸などのブルーカラーが目立つ。また新ひだか町という地域性から、地元の漁業に関連する季節労働の仕事もみられた。

老年層では22人中14人が無職である。そのうち夫が就労しているためのいわば専業主婦のため無職というのは3人のみであり、高齢のため、年金生活、体調が悪いなどの理由で就労していない場合が多い。また夫婦2人暮らしで、ともに無職という例もみられた。

表1-1 調査対象

	未婚	既婚 再婚	離別 死別	現在の職業
青年	2	6	1	牧場関係、自由業、公務員、事務、土木関係、無職(4)
壮年	5	15	6	農業(3)、公務員、建設、土木、事務、運輸、自由業、自営業、季節労働、無職(4)、パート(3)
老年	1	15	6	自営業、農業、運輸、建設、自動車、管理人、無職(14)

表1-2 同居家族

同居家族 (本人を含む)	青年	壮年	老年	合計
1人	0	6	5	11
	0.0	10.5	8.8	19.3
2人	1	8	10	19
	1.8	14.0	17.5	33.3
3人	2	4	4	10
	3.5	7.0	7.0	17.5
4人	3	3	2	8
	5.3	5.3	3.5	14.0
5人	1	2	1	4
	1.8	3.5	1.8	7.0
6人	1	1	0	2
	1.8	1.8	0.0	3.5
7人	1	1	0	2
	1.8	1.8	0.0	3.5
8人	0	1	0	1
	0.0	1.8	0.0	1.8

注) セルの上段は実数の表記、下段はデータ総数を分母とする百分比(%)となっている。

第2項 アイヌの血筋

アイヌの血筋について、青年層、壮年層、老年層の年代ではそれぞれどのような状況だろうか。まず、青年層をみると、9人すべてがアイヌの血筋であった。そのうち、父母ともにアイヌであった者は2人だけで、残りはすべて父母のどちらかが和人であった²⁾。

9人のうち、結婚経験をもつのは7人であるが、配偶者もアイヌである者は2人だけで、残りは和人が3人、不明が2人である。不明の2人は、和人だろうと考えてはいるものの、とくに確認したことはないという者である。

特筆すべきは、父母ともにアイヌであった2人についても、その配偶者は和人であった。つまり父母ともにアイヌの血筋であり、本人の世代までは純粋のアイヌの血筋であったとしても、次の世

代では和人と混血になるということである。

表1－3 アイヌの血筋（青年層）

婚姻	本人血筋	父・母血筋	配偶者血筋	配偶者父母
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
未婚	アイヌ	不明・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	不明	—
未婚	アイヌ	和人・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	アイヌ	和人・アイヌ
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	不明	不明
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
離別	アイヌ	和人・アイヌ	アイヌ	和人・アイヌ

つぎに壮年層をみてみよう。40代50代の壮年層では、本人の血筋がアイヌである者は23人、和人は3人である。23人のアイヌの血筋をひく者のうち、父母ともにアイヌである者は12人と半数程度となる。残りの半数は父母の一方がアイヌであり、もう一方が和人である³⁾。父母ともがアイヌである12人のうち、さらに配偶者もアイヌである者は3人のみであった。その3人については配偶者の父母もアイヌであった。

表1－4 アイヌの血筋（壮年層）

婚姻	本人血筋	父・母血筋	配偶者血筋	配偶者父・母
既婚	和人	外国人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
死別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
未婚	アイヌ	和人・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
未婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	—	—
未婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	—	—
離別	アイヌ	アイヌ・和人	アイヌ	アイヌ・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
離別	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	不明	不明
既婚	和人	外国人・和人	アイヌ	和人・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
死別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
離別	アイヌ	和人・アイヌ	不明	不明
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
未婚	アイヌ	アイヌ・不明	—	—
離別	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
未婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ

老年層はどうだろうか。22人の老年層のうち、アイヌである者は20人、和人が2人であった。和人のうちの1人は養子であった。さらに20人のアイヌのうち父母ともにアイヌである者は13人である。ただし、配偶者もアイヌである者は13人中5人だけであり、その5人の配偶者のなかで、父母ともにアイヌであるのは2名だけだった。

表1-5 アイヌの血筋（老年層）

婚姻	本人血筋	父・母血筋	配偶者血筋	配偶者父・母
未婚	和人	アイヌ・アイヌ	—	—
既婚	アイヌ	アイヌ・和人	和人	和人
死別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	和人	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	アイヌ	和人・アイヌ
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	アイヌ・和人
死別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	不明・アイヌ
既婚	アイヌ	和人・アイヌ	アイヌ	アイヌ・アイヌ
死別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
死別	アイヌ	和人・アイヌ	和人/アイヌ/和人	和人 3人目
離別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
離別	アイヌ	アイヌ・アイヌ	アイヌ	—
既婚	アイヌ	アイヌ・アイヌ	和人	和人・和人
既婚	和人	和人・和人	アイヌ	アイヌ・アイヌ

このように、青年層、壮年層、老年層におけるアイヌの血筋をみると、年齢層が高い老年層ほど、父母ともにアイヌである比率が高く、年齢が下がるほどアイヌであるのは父母のどちらかであることが多かった。つまり年齢層が若いほどアイヌの血は薄くなっているとみることができる。

この結果を前回2009年に行われた札幌とむかわの調査と比較してみると、本人がアイヌであり、その父母もアイヌであるのは、今回の調査では青年層22.2%、壮年層47.8%、老年層65.0%、平均では45.6%であるのに対し、札幌は青年層8.3%、壮年層38.9%、老年層40.0%、平均31.1%、むかわは、青年層13.3%、壮年層41.2%、老年層36.8%、平均31.4%であった。

このように、新ひだか町の比率が札幌やむかわと比較して高いことがわかる。この地域でアイヌの血筋が濃いのは、ここ旧静内町・旧三石町や隣接する新冠町がアイヌ民族の中心的な居留地の一つであったことが影響しているだろう。北海道環境生活部が平成18年に行なった調査によれば、日高支庁のアイヌは7,530人で道内でもっとも多い。隣接する胆振支庁も6,622人と多いが、人口比で比較すると日高の9.2%に対して胆振は1.6%と大きな差がある（北海道環境生活部 2007）⁴⁾。そのためアイヌ同士が会合う可能性も大きいことが少なからず関係していると推察される。

第3項 アイヌであることの捉え

ではアイヌの人々は、アイヌの血筋であることを、どのように捉えているのだろうか。まずは青年層から確認してみよう。アイヌ民族であると意識したことについての発言を整理すると、もっとも多いのは、「意識していない」というものである。意識しないという発言の背景には、これまでの生活の中で、アイヌであることを意識するような場面に遭遇しなかったことがある。それに加え、アイヌとしての身体的な特徴が目立たなかったという発言もあった。たとえば、「親もそんなにアイヌくさい顔でもないんでね」というように、アイヌの特徴である「ホリの深さ」や「毛深さ」が目立たなかったということである。

では反対にアイヌであることを意識した人たちは、そのことをどのように捉えていたのだろうか。目立つのはアイヌ文化にふれたことでアイヌであることを意識したという者である。「伝統的なことを見たり聞いたりして」と、冠婚葬祭を通して周囲の大人たちが話をすることを聞いて、さらにはそれらの人々を見ることによって「自分もそうだろう」と考えるようになったというものである。

ただし、これらの中に否定的な意識はみられない。むしろ積極的とまではいかなくても、アイヌであることを、子どもを含めた周囲に理解してほしいという考えが目立った。

表1-6 アイヌ民族であると意識したこと（青年層）

- ・高校出てからとか、社会人になってからいろいろ。伝統的なことを見たり聞いたりして。中学校、高校時代つきあっていた子もアイヌだったんで。
- ・アイヌ文化に囲まれた生活。朝の8時から晩の5時まで踊りやって。その間に薪切ったりとか木彫りしたりとか、あとムックリつくったりとか。もうアイヌの生活ですね。
- ・（子どもにアイヌ民族であることを）そうですね、自分と同じくらいの時には理解してほしいと思います。
- ・高校を卒業してから身内の冠婚葬祭とか、身内のとこに出ることが多くなって、それでそういう大人たちとかおじさん、おばさんがそういう話をするので、そうなんだと思うようになってきました。ショックでしたね、今は慣れてきてスネ毛とかもそったりとか、そういうのもできるようになって慣れてきたんですけど、その頃はちょっとショックだった。
- ・アイヌ民族というか、今の保存会（注・アイヌ文化を対象にした静内民族文化保存会）もそうなんですけど、人数が今少ないんですよ。で、親の友だちのお母さんというか、友だちなんですけど、私はアイヌだけ入らないという人もいるし、何なんでしょうね、何かもうちょっとそういう。知ってほしいというか、もうちょっとわかってほしいのかな。
- ・アイヌの血を継いでいるんだと。…うちに家系図はあるんですね。そのときの家系図をもらって、それで見たんて。すごいじゃないですか。ごちゃごちゃしてて。何番目とかも見てないんですけど。
- ・やっぱり親がアイヌだっていうのを、聞いたのかな。親に。漠然としてた、うーん、あまり実感なかったですね。親もそんなにアイヌくさい顔でもないんでね。うーん。
- ・（自覚は）小さい時からですね。やっぱり、実家のところが結構そういう人が多くて、自分もそうだろうって頭もあったので。

アイヌの血筋を意識する発言がさほど多くなかった青年層に比べ、壮年層ではアイヌの血筋を意識する場面が多くみられた。アイヌとしての身体的な特徴である毛深さについて「何でこんなに毛があるの」と親に尋ねたり、小学校のときに毛深いことに気づいた、などである。さらにアイヌであることを友だちから指摘されたことで自らのルーツを意識した者もみられる。

上記のように何かのきっかけでアイヌであることを意識したというのに対して、とくに意識はしなかったものの、「物心ついた時からわかっている」や「きちんとじゃなくても意識はしているさ」のように、ごく自然にアイヌであることを知った者もいる。

ただしどちらにしても、確実にそうであるか否かについては、「親に聞いた」ことではっきりと理解したという者が多い。身体的な特徴や友人からの指摘と、きっかけは異なっている、そのことを親あるいは祖父母に確かめるなどして自らがアイヌであると自覚するようになっている。

その時期については、年少時から結婚後までさまざまであった。結婚後に意識するようになった中には、結婚するまでわからなかったという例もある。嫁いだ後に母親が「よかったね、お前は濃くないから」と言われ、何が濃いのか、薄いのかと考えたという。またアイヌ協会に入会した後で、アイヌの血筋について聞いたという声もみられた。

表1-7 アイヌ民族であると意識したこと（壮年層）

- ・父親がアイヌの家系で25%、母親の家系はみんな和人だが、養女なんだわ。中略…育ての親はアイヌ。父方の祖父のほうはどちらもアイヌだ。
- ・そういう強い自覚というか、アイヌであるのは間違いないとは感じますけれどもね。子どもの頃からです。馬鹿にされてましたからね。一部だけなんです。そういう、いじめとかそういうんじゃないで口で、やっぱり。「アイヌ、アイヌと」。
- ・調べてもらって、本当にアイヌの血引いてるかつちゅうので調べてもらって。それを見て、結果みたってそういうふうになってたもんで、ああ思った。それまでぜんぜん知らなかったもんでね。
- ・（アイヌ民族というのは）いつぐらいなんだろうね。どの程度、その理解度にもよると思うんですけども、要するに家の中で生活していれば、明らかに外にないものがやっぱり目に付くんで、で、やっぱりどうなんだろうな、小学校時代、アバウトですが小学校時代でもいいでしょうか。
- ・「何で」って親に聞くじゃないですか。なんでこんなに毛があるの。何も答えてくれなかった。最初はね。で、しつこく聞くとばあちゃんとか私たちがもうだしてって言うことで言われて。

- ・自覚、どうだろう。小学校の頃には毛深いとかで、そういうのは分かってましたよね。…中略…自覚というよりアイヌ民族というのはこういうものだというのは、協会の活動とかでわかったくらいで。
- ・(子どもは) 親がアイヌだということはわかってますけどね。常日頃そう言ってますから。女房のほうは完全にシャモですから。自分だって途中で混ざってるんだろうし。ほとんど子どもたちは親はアイヌだ、アイヌの血が流れてることは3人とも理解はしてますけど。
- ・小学校3年になったかそのくらいのことは、きちんとじゃなくても意識はしているさ。
- ・きっかけも何も物心ついた時からそういうのはわかっている。
- ・協会に入ってからアイヌの血筋について聞いた。誰がそっちの方なのというのはやっぱり聞きましたね。父方のおばあちゃんだよ。昔の人ってね、何か複雑で、育ちとかがね。だから、どの血筋なのか、何番目の親なのかっていう、そういう感じになっちゃって、でも、種はあれなんだけど、育てられたのは違うっていう。
- ・父方のおじいちゃんのきょうだいとか写真あるって言っていたから、おじいちゃんも、もしかしたらアイヌの血を引いていたのかもしれないですね。わたしははっきりわからないです。おばあちゃんのほうは多分間違いなんですけど、おじいちゃんのほうがちょっと定かじゃないんですよ。おじいちゃんも、おばあちゃんも小学生のときになくなっているものですから。
- ・うちのお母さんはきれいなほうだから、毛深くもないし。父親は写真であるだけで、見たら別にきれいな写真だし。おばあちゃんがそれ系統だから、その子どももかなと推測でいったのか。でも、子どものときにそうやって育ててきて、社会に出て、そういう波は治まって、今度結婚してから、お前の父親がアイヌだから、おまえは純正で2世だろうと言われたら、またそこでガーンと来て。直系だろうとかって。何なの、2世とか直系とかって。わかんない。叔母さんが生まれて、おばあちゃんから出た子どもが父親で、そこから出て、昔の民族の人って見たこともないし、何かそういう催し物に参加したときに見たことはあるけど、それが何かも分からず育ててきて、普通の生活のように当たり前に育ってきたのに、どうして差別みたいに言われるのかなど、小学校のときから思ってきたし、ましてや大人で結婚してから父親がアイヌでお前は2世とか、だからどうしたのって思うんだけど。
- ・(アイヌの自覚は) 結婚した後ですね。母が、ぼそっと「よかったね、お前は濃くないからって」。で、何が濃いのかな、薄いのかなんて思っ。
- ・小学校3年生くらい、クラスの子が言って、あっ、そうなんだと思って。親に聞いたらそうだっていう話だったので。
- ・小学生のときはあんまりぱっとしてなかったんですけど、中学頃になるとある程度、こう回り見ててそのいじめられてる子とか見てたり、あっというものがあつたし、そうだな、うちもってというのが、多分父とか見てると父は分かりやすい人だったんで、うちもそうだなって思っ。一時逃避しようじゃないけど、わたし、もらいっ子でしよって母に言ったことがあったんですけど。お前どう見ても、うちの父さんそっくりだ、お前は父さんの子だって言われて、やっぱりかって思っ。中学頃にはきつとうちもそうだな、自分もそうだなってというのは自覚っていうか、そうだなって、そう自覚はしましたね。
- ・最初の相手の父親はやっぱり内地の人だから、うちと同じさ。うちも父親内地だから。母親どっちの母親も自分の母親も混ざって薄くなってる者同士だから多分同じだと思います。お互いにいまだに別れたけど、そのことに対して一切ふれないし会話しても、うーんって自分がそうだとも言わない。お互いに言わなかったね。
- ・一番最初に知ったのは小学校2年生のときに、学校帰りに同級生の子たちが4〜5人周りにいて、「お父さんとお母さん、どっちアイヌ？」って聞かれたんですよ。それでアイヌってなんだろうって思ったんですよね。それで家に帰って父親に聞きました。
- ・アイヌの人ってほんとになんちゅうんだろう、血が荒いっていうか、気性が荒いっていうのかな、それが一番。

老年層はどうだろうか。老年層では壮年層以上にいじめや中傷の経験からアイヌであることを意識した者が多い。「小学校ね、物心ついてバカにされた」「やっぱり、学校、中学の頃からだよ、バカにされて、あーそうかなと思って」「アイヌ、アイヌってバカにされてね、ああ、わたしらアイヌなんだと思って」など、周囲の人に揶揄された経験が大きい。

また老年層で特徴的なのは、アイヌの血筋について親だけでなく、その上の代まで説明できる者が多かったことである。「父方の孫じじはシャモ（和人）なんだけど。孫じじは内地生まれで道内で結婚…（中略）日高に来てアイヌと一緒にになったの。わたしの孫ばあさん、入れ墨入れとったもの、口に。そして、それと一緒に出来た子どもが今の私の父親ですね。それも一応半分シャモになるね。半分シャモで半分」や、「アイヌの血筋。父方は全員和人。母方は祖母は和人。祖父はアイヌの血が25%、その上の曾祖母が半分アイヌの血が入っていたと聞いている。曾祖父は和人。母が受け継いでいるアイヌの血は12.5%なので本人は6%くらいになる。」と、アイヌの血筋であることのルーツについて詳しい。

ただし老年層の中にも、親がアイヌであることについて、あえて話をしなかったという例もある。「親からはない。親は一切そういうこと言わなかった人」や、「母親が、〇〇ちゃん、そんなことしてね、言われたからって、全然何も気にすることないよって言ってたからね。中学の頃にアイヌの勉強している友だちから言われたときも。そんなことなんか覚える必要ないよって言われたの」と、親が子どもについてアイヌであることやアイヌの文化を伝えようとする環境ではなかったという例もある。

表1－8 アイヌ民族であると意識したこと（老年層）

・小学生の頃、5年からその、イナウを見て、あ、これはアイヌの血筋なのかなっていう記憶を、そして来る人たちの話し聞いたり。で、父がほらその火にむかってね、いわゆる当時でいえばそのストーブですよね、に向かってそういう先祖供養みたいなことのまねっっちゃうのかな、をやっているのを見て、あ、あれはアイヌの行事の一つなのかなっていうふうに自然にそれを受け入れたって感じね。 ・小学校ね、物心ついてバカにされた。そのとき、でも「ああ、俺はアイヌだ」とそう思っていました。だけど、それを堂々とね「いや、俺はアイヌだよ」ってね、そういうふうに言い切れたかという、やっぱりそれは言い切れない部分やっぱり、恥ということはないんだろうけど、差別されてる何かがあって、心の中にそれが残ってるから。 ・物心ついたときから、もうみんなから言われるからね。今だからこんなアイヌ、アイヌって言えるけど、全然恥ずかしくて言われないですよ。生活が全然違ったから。 ・父方の孫じじはシャモなんだけど。孫じじは内地生まれで道内で結婚、2回してるんですね。日高にきてアイヌと一緒にあったの。わたしの孫ばあさん、入れ墨いれとったもの、口に。そして、それと一緒に出来た子どもが今の私の父親ですね。それも一応半シャモになるね。半分シャモで半分。そして、私の母親のほうは東北なんです。だから〇〇〇といったらほとんどみんなシャモに近いんだけど、昔のことだからちょっとアイヌが混じればアイヌ、アイヌと馬鹿にしたからね。…だけどアイヌといったら昔からいっぱい毛が生えて、だけどわたしらとか〇〇は毛がないんです。薄い、ほれ、足をみてもわかるでしょう。毛ないでしょう。ほれ。 ・まあ40代くらいからはもうアイヌだと思ってたな。いや、30代だな。 ・やっぱり、いじめが始まってからだろうね、アイヌって「ばば、アイヌって何？」って言ったら「わしらのことだ」って。その頃は口も入れ墨してあったり、手も入れ墨してあったり「ふーん、そういえばシャモのいいないなあ」と思ってた。 ・中学に入ってからですね。同級生は沢山いましたけど、みんなアイヌでしたから。 ・母親が「〇〇ちゃん、そんなことしてね、言われたからって、全然何も気にすることがないよって言ってたからね。」中学の頃にアイヌの勉強している友だちから言われたときも。「そんなことなんか覚える必要ないよ」って言われたの。 ・三男がそうやってね、アイヌだからつきあえないって言われたのは、ちょっとショックというか。それから次男が嫁さんもらうと言ったときも、お前何か言われたのと言ったら「いや親に会ってないから何もいわれない」って。 ・やっぱり、学校、中学の頃からだよ。バカにされてあーそうかなと思って。だからもうバカにされとったからね。子どもにだけは惨めな思いさせたくないって思ってた。アイヌとは結婚しないって。 ・アイヌ、アイヌってばかにされてね、ああ、わたしらアイヌなんだと思って。アイヌだって、そうだよ、口染めたばあちゃんだって、うちのばあちゃんの妹でも1人いたんだからね。ばあちゃんだと思わなかった。 ・小学校4年生から5年生。その「アイヌ」って言われたの。4年生、ばあさんに聞いたの。母親、小学校1年生のときに亡くなったから。思ったけど、大したあれよ、頭のなかにこびりついて残るほど考えなかった。 ・親からはない。親は一切そういうこと言わなかった人。山から下りてきて、ちょっと歩いてたら、ああ、あれはアイヌだって。最初は何言ってるのかなあって思ったけど、だんだんと年いくに連れ、気づいただけで、だれからも教えてもらったわけでもないし、どこに働いても差別はなかったよ。そういう点ではね。 ・アイヌの血筋。父方は全員和人。母方は祖母は和人。祖父はアイヌの血が25%、その上の曾祖母が半分アイヌの血が入っていたと聞いている。曾祖父は和人。母が受け継いでいるアイヌの血は、12.5%なので本人はアイヌの血は6%くらいになる。曾祖母がアイヌであるということについては、25、6歳に聞いた。曾祖母が写っている古い写真があり、それをきっかけに叔母さんから曾祖母がアイヌの血を引いているという話を聞いた。曾祖母はきれいな人だった。母の父方のきょうだいは影が深く、その面影があるように思った。 ・血筋はアイヌ。父母、祖父母、曾祖父母はアイヌ（祖父母の代について、早く亡くなっているのははっきりわからないけれどアイヌだと思う）。子どもの頃から親や近所の大人など周りを見ていて、自分がアイヌであることに気づいていた。親や近所のアイヌ民族は何かあれば行ったりきたりしていたから、なぜだとは思っていた。 ・（アイヌ民族として意識することは）ありますね。やっぱり一応、なんだかんだといたってアイヌの血を引いてるから。シャモにはなれないですね。みんな、混血、混血と言うけど、中身はみんなアイヌなんですね。（アイヌの人は）わかるね。だけど今だったらもう開けてるから、だんだんアイヌの血がみんな薄くなってからわからないよ、今なら。だけど昔はやっぱり徹底してわかったね。見た目で見分かりますね、奥目が多いから。アイヌの人は目が引っ込んでる奥目が多いんです。
--

第2節 結婚と次世代への意識

第1項 結婚時の状況

青年層9人のうち結婚の経験を持つ者は7人であるが、アイヌであることが結婚の障害になった者はみられなかった。ただし、それはアイヌであるという民族性をまったく考えなかったということではない。「混ざってるからって相手には最初に言うようにした」「うちはそういう（アイヌ民族の）血が入ってるからね」などにみられるように、アイヌであることが結婚後に知られ問題とならないように、初めに伝えているというものである。

また、アイヌの血が濃くなることを恐れて、結婚相手には和人を選んだという人もある。その場合、自分自身がアイヌであることを伝えることにもとまどいがあったと述べている。

このように青年層では、結婚に際して嫌な経験をした人は少ないものの、自分がアイヌ民族であることをまったく考えなかったわけではない。

アイヌの血筋の濃さでいえば、青年層は壮年層や老年層と比較して薄いといえるが、結婚となると、濃さというよりも、アイヌの血筋であるか否かが問題であり、自らのルーツを意識しないわけにはいかない現状であったといえる。

表1－9 結婚時の状況（青年層）

- ・結婚する際にはとくに苦労はしていない。民族性を考慮することも、これ全然なかった。
- ・混ざってるからって相手には最初に言うようにしたんですね。（つきあう相手は）何も言ってこないですね。相手も何も言ってこないから。軽蔑とかそういうものもないから。口に出さないだけで何か思っているのかもしれないけど。
- ・（民族性を考えたことは）全然ありません。ではなくて、普通に好きになったから。
- ・（結婚するときに問題は）何もないですね。（結婚相手はアイヌだってことを）知っています。「アイヌの踊り行ってくる」って普通にしゃべってるんで。相手は北海道の人。
- ・20歳で結婚、アイヌの踊りをしていた頃、アイヌの格好で出会っているから。自分のこともある意味アイヌだって最初から分かかってもらってたし。（民族性を考えたことは）なかったですね。全然言うこともなかったですし、ましてやそれこそ初めてつきあったのも〇〇でアイヌばかりでしたからね。
- ・未婚。（恋愛のときに民族性を考えたことは）いや考えたことないですね。
- ・もともと結婚相手は、本州からやってきてアイヌっていうものどんなものか知らないんで、でもこっちで旅してて、アイヌってもの知って、なんかかっこいいと思って、尊敬しているみたいで、うーん…とは言ってましたね。やっぱり、アイヌの人とは結婚したくないと思って、子どもに、ほらそういう濃い血筋が出たら嫌だなと思って和人を選ぶようにしてました。自らアイヌだってことは言ったことも（ないし）、言えなかった。うん、隠してましたね。（それによって相手の態度が変わるのが）うん、怖い。でもそういう人じゃなかったんで堂々と言えた。
- ・反対はなかった。（民族性を考えたことは）ないですね。向うもそういうふうには思っていないと思うんで。
- ・普通に自分で「うちはそういう（アイヌ民族の）血が入ってるからね」っていう感じでは言ってます。（それで苦労したことは）ない。（もとの結婚相手も）多分そうだと思うんですよね。

壮年層26人のうち、結婚経験をもつのは21人である。今回の調査の壮年層は、父母ともにアイヌである比率が半数近い、つまりアイヌ民族の血筋がいわば濃いといえる。

そのような壮年層において、アイヌ民族であることが結婚の際にどのように影響したのだろうか。

全体をみると「とくに問題にならなかった」とする者がもっとも多い。しかしそれとは逆にアイヌであることが障害になったという者もある。「アイヌであることを理由につきあえないと言われた」「向うの親に反対された」「おまえアイヌだべって言われましたからね。中略…何しにそんな相手と結婚しなきゃダメなんだって…後略」などというものである。

また結婚の際には問題とならなかったものの、結婚後にアイヌ民族であることを指摘され嫌な思いをした者もみられた。なかには差別されたくないとの思いから、結婚相手にアイヌを選んだとする者や、青年層でもみられたように、結婚時や交際の際に相手にアイヌであることを告げたとする者もいた。またそれとは逆に、「アイヌであることを言うてはいけない」、「アイヌの人と結婚すると血が濃くなるからダメだ」、と親に言われ、結婚相手にアイヌを避けたとする者もみられた。

このように壮年層は青年層に比べ、困難な経験をもつ人が多くみられ、結婚の際に民族性をめぐる困難や障害を乗り越え、結婚に至ったという例が多くみられた。

表1－10 結婚時の状況（壮年層）

- ・23歳で恋愛結婚。結婚の際にはとくに何もなかった 自然に恋愛結婚。
- ・相手がアイヌ。結婚前から知っていたがとくに気にしなかった。両親の反対もない。
- ・21歳で相手と知り合って（中略）親戚だと言って言われたときに、ああ、みたいな。普通に、別に驚きはなかったと思います。
- ・20過ぎた頃につきあってた相手がアイヌであることを理由につきあえないといわれた。アイヌだから結婚できないと…そんなの2～3回あった。「シャモでなくてアイヌに声かけりゃよかったのにな」。今の結婚相手は和人だが、相手の親に言われたとか、自分の耳には入ってこなかった。結婚相手の家も複雑で親と疎遠。
- ・23歳で結婚した。中略…最初の結婚相手はアイヌ、とくに嫌なことは言われない。今の相手は「まあ、ちょっと入っているのかもしれない」向うもバツイチなんで、両親も他界してるんで（わからない）。
- ・結婚するときの困難は「全然ない」。子どもの結婚の際も、相手は和人だが、問題になったこともない。
- ・結婚の時には、普通にお見合いして結婚したんですけど、そういう血筋があるからという話し合いはしなかったんですけど、生まれた子どもが、産毛を背負って毛深いじゃないですか。赤ちゃんって。ましてや3月生まれで体に脂肪がたくさんたまるときは体を保護するときに体毛がすぐくついて生まれるんですけど、そしたらすごく猿みたい毛深くて、お前に似てるからというような。ただそういうことから始まって、毛深いか毛深くないとか。
- ・（民族性を考えたことは）別にないですね、そんな。
- ・29歳で結婚。まあ遠距離で電話でつきあっているときは何も言いませんし、まあ見てればわかるんじゃないかっていうものはあった。ただ結婚決めたからね、曾祖父の写真、昔の着物着て、熊持ってる写真あったんですが、それを見せて、うちはこういううちなんだよって、もう嫌とは言えない時期にきてそういうことを言いましたよね。…返事は求めないですし。それでもいいかって言って。ダメだっっちゃうたらどうすんのよって話ですからね。（向うの親に反対されたことも）なかった。
- ・（アイヌだと）確実に思ったのは、結婚した後に結婚相手に言われた言葉がショックでした。

- ・「母さんと父さんの子に生まれたから、こんなにみたくなくて毛深くうまれた」って言ったんだそうだ。いや申し訳ないことを言っちゃったもんだ。で、子ども生まれて子どもにそって言われたらどうしようみたいなね、自分で言ったくせに。(結婚に際しては)逆に、あえてアイヌを選んで、選びましたね。ていうのは、違う人と結婚した時に、やっぱり人種差別って肌が、まず肌から差別されたり軽蔑されたりするのは嫌だから絶対アイヌの人としか結婚しないと思ったし、ちょっとあれだね、言ってることちがうかもしれないけど。
- ・向うの親に反対されましたね。それこそ、やっぱりアイヌの子でしょうみたいな感じで。でも関係なく、一緒になりましたけど。(相手は)気にしてなかったですね。そっから親の縁切って会ってないですね。だからいいかって。それっきりですね。
- ・高校生の頃から知ってたんで。休みの日、遊んでる仲間の1人だったんで。(民族性は)ないです。最初に、向うも見て分かるし、ね、別にそれでどうだっちゅうこともないし、気にはしたことないよってことは言ってくれますね。理解してくれています。
- ・義父が北海道だったらアイヌ文化のどうのこうのとか、弟さんも北海道っていったらアイヌのやつあるよねって話はしたけど、あるねって感じで、普通に話はしたし。それについて、やんや、やんや言われたのはない。
- ・18で結婚、20で子ども、22で離婚。(アイヌであることを)母親から絶対にいっちゃダメって。アイヌの人と一緒にになったらまた血が濃くなってお母さんみたいにいじめられて育つから絶対ダメだダメだって朝から晩まで言われてる環境で育ってるから、自分は余計警戒心もって育ったんだけど。やっぱり相手方の家族はアイヌの人嫌ってるみたいで、たまたま自分はそんなにひどく出てないのではらばっくれていますけど、そうだってことは言ってます。言いません。(子どもの結婚相手は)ちょっとでも薄い、うちと同じ感覚なら許せるけど、うちよりちょっと濃くなるとちょっとなって、やっぱりちょっと待って言うと思う。親と同じく。なぜだろう、やっぱり苦労したからかな。そういうことに対して。
- ・29歳で結婚。(苦労したことは)ない。(民族性を考慮すること)全然ないです。
- ・(結婚相手は)北海道の人間じゃないので、あまりそういうことは気にしていないと思う。そういう面ではすんなり。中略…相手が〇〇なので、遠いからこっちなんてほとんど分からないでしょ。だからアイヌという認識もほとんどなかったと思う。こっちにきてから、昔はウタリ協会っていったから「集まりにいくわ」「へー」みたいな。別段そんな何もわかっていないのが現状ですよ。
- ・うちの母親は自分はアイヌ民族だっていうことを相手に必ず伝えなさいって言っていました。
- ・(結婚の苦労は)ありましたよ。おまえアイヌだべっていわれましたからね。いや相手のほうの実家にね、何しにそんな相手と結婚しなきゃダメなんだって、まして〇〇だなんて怒られました。アイヌの色出さないようにしましたよ、結婚式は。(つきあっているときアイヌの血筋であることを)話しましたよ。関係ないって言っていましたよ。だから一緒になったんじゃないんですか。20歳過ぎてるんだから一緒になろうって、家をでてきたっていったら語弊あるけど。
- ・お見合いした帰りに父親が「アイヌの人だったね」とは言いました。(なぜ言ったのか)うーん、そこは聞かなかったんですけど、やっぱりアイヌの人と一緒にさせたくないのかな。
- ・45、6まで(見合い)そんなことばかりやってたけど。(民族性は)いや、どうなの、あんまり気にしてないんじゃないの？自分らはちょっと気にするけど、向うはあんまり気にしてないようだから、あんまり考えたことないけど。

老年層の結婚時はどうだったのだろうか。結婚経験を持つ21人の老年層をみると、アイヌであることが結婚や交際の障害となったという声は壮年層ほど多くはないようだ。多くの人が結婚する際に、アイヌであることが障害とはなっていないと述べている。

アイヌであることで嫌な思いをした人の中には「(結婚後) きょうだいがアイヌだ、アイヌだって。きょうだいが7人いるんですけども、まずそれはひどかった」や、「(結婚相手に) アイヌ、アイヌとバカにされて」と、具体的に何かがあり言われたという理由ではなく、アイヌ民族であるというだけで結婚相手やその親族に揶揄されたというものである。

ただしこのような例は老年層全体からみると、ごくわずかであり、先に述べたように多くはとくにアイヌであることが問題とはなっていないと述べている。

ではその要因はなんだろうか。それぞれの発言をみると、アイヌであることをわかっていた、相手もアイヌであった、アイヌではないがアイヌと近い関係にあった、一緒になるという気持ちが強く民族性は考えなかったということが多いことがわかる。

表1-11 結婚時の状況(老年層)

- ・最初の相手はシャモで、幼なじみ。だから向うのお母さんも何も反対しなかったし、娘のように可愛がってくれました。その後、離婚。2人目はアイヌ。もうきょうだいが「アイヌだ、アイヌだ」って。きょうだいが7人いるんですけども、まずそれはひどかった。自分たちもそんなくせに(アイヌの血筋なのにアイヌとの結婚を反対する)。
- ・20で結婚した。恋愛結婚、同じ静内の人で、親同士がわかってたからそれで結婚した。まだ若いから親に反対された。同じ部落、相手もアイヌ、今というバツ。
- ・結婚は19歳、私の親は若いし、姑、小姑いるし反対した。叔父の一人が「今度結婚したらね、何も血筋がないのに、なして選ぶんだって言ったから、それだって意味わかんないわさ、わたし」。民族性を考慮したことはない。
- ・見合いだからわかって一緒になったと思うけど。今それこそ、そんなの嫌なら最初から見合いしないし。(その話をしたことない)(民族的なことを)気にしてなかった。
- ・22歳で結婚。(結婚するときに苦労したことは)「ない」(民族性を考えることも)別にあんまりないですね。自分はアイヌ人であって結構ですと思ってたから。別に、いやだとは思わない。やっぱり同じ人間だと思ってるから。別にどうってことない。ただ、陰口聞いたりするとなんで、って。…あんまり自分がアイヌ系でいやだったとかそんなことは考えていない。
- ・婚約まではいったが婚約者が亡くなった。相手はアイヌの人。自分がイチャルバとかをやるから多分和人ではうまくいかないかなと思ってたから。かえて今の子は嫌がるかもしれないけど、イチャルバとかやっていると。

- ・1人目と結婚したのが19歳のとき。そして次の人と一緒になった。結婚相手は両方ともシャモ。だからアイヌ、アイヌと馬鹿にされて。一番先の相手に。仕事場で知り合って結婚したけども、実際にはアイヌでバカにされた。
- ・25歳かな。そのときに、そこね親の反対はあったけどね当然。もう大して、どこの馬の骨かわからないと。うん。で、アイヌだからってっていう反対ではなかったのに記憶はあるんですけど。そんな感じ。うん。そのアイヌだということでも当然わかってもらって結婚したからね。だから言葉は、まあアイヌ、要するに差別のない社会を目指して頑張るってことで結婚したみたいなもんで。
- ・毛深いから恥ずかしいなと思ったけども。毛深い子どもを生むわけにいかんから、和人のひとと結婚しただけ。1人目も2人目もそうだよ、と思って結婚したけど、1人目の人半分混ざってた。「なんでこんな毛深い子ども生まれたべと思って気になりながらいて。あれば新聞配達にいつて、スネ見て「あれ言うけどごめんね」「いいじゃん、いまさら、生んでしまっ」って言ったら「そうだよな、母さんしらなかったもん。ごめん」って。
- ・結婚し再婚。アイヌであることは知っている。相手も転々としてた人だから。だから別に仲良くおつきあいしてるよ。相手のきょうだいとも。
- ・いや、そういうことはなかったですね。まあ、向うも初婚ではなかったからね。このちっちゃい町でさ、だいたい僕、みんな知ってますから。中略…それまで縁がなかったというのか、縁をのがしたというのか。多分縁を逃してたんだね。その中にはさ、やっぱり「ああ、この人、アイヌだから嫌だ」というのもあったと思うよ。うん、結構ね、紹介されたりさ、そういうこともあったんで、見合いしたこともあるし、だから、その中でそういうのがあったかもしれない。あえて言うこともないけど。
- ・結婚相手はやっぱりそういうウタリ関係、アイヌ関係の人に育てられたシャモなんだけど。けども、そういう風に育てられたから、向うもそんなに気にしないでいたから、アイヌちゅうのは全然気にしないみたいだった。そっちのほうは大した問題ないと思うけどね。別にどううちゅうことなかったような気がするけども、できればやっぱり馬鹿にされるから、やっぱりシャモの人ほしかったんでないかと思うよ。
- ・（民族性のことを話し合うことは）ないね。（アイヌだとは）分かってたと思うよ。当時なんて人たくさん使ってたから。みんなから「社長」っていわれてるから何の文句もなかったんじゃないか。
- ・4回結婚しただけ、アイヌは今の相手だけ。あとはシャモ。今の相手の父親はアイヌ、母親は混ざりアイヌ、半シャモ。ああ、それはありましたね。向うの親元に、そういう関係でこれは隠し看板なしにね、まるっきりアイヌではないけども、アイヌの血引いてるよ、まあ3分の1か4分の1は引いてますよということは、これは絶対ばれることだからね。それは最初から言う。言って聞かす。そのほうが自分も楽し、隠してるよりね。それでやむものだったしょうがないもん。だからそれもあって、まあ親元は頭からくれないっていったんだよね。
- ・民族性を考慮したことはない、苦労もない。私はシャモ、主人がアイヌの人。
- ・（結婚で苦労したことは）ないです。
- ・まあどうこうした訳でないけど、一緒になるんだっていう気持ちしかなかったから、それでどうこうって言われてもわからない。前の相手とは恋愛結婚。（今の時には）再婚だから、それで言われたくらいかな。（民族性は）今も考えてないし、自分がやることにに対しては認めてちゃんと一緒にやってもくれるし。だから別にそういうのはないですね。
- ・別に関係ないな。相手もアイヌの血統だから。結婚相手は平取の奥の〇〇だから。母親のほうは、もう、ほんとにもう、父親も和人様だ。（相手の）母親がアイヌ、アイヌの血統書取ったら今でもアイヌのパーってでてくる。父親は和人。
- ・結婚する前にとくに苦労したことはなかった。恋愛や結婚をするときに民族性についてとくに考慮したことはなく、結婚できれば誰でもいいと思っていた。母親もそういう考えだった。結婚する前に相手にアイヌであることは話したが、何も言われなかった。アイヌであることについて何も反対はなかった。
- ・20歳のときに人に紹介されて結婚した。相手の両親がどう考えていたかわからないが、相手は旭川に叔父さんがいて、近文のアイヌコタンに何回も行ったことがあり、アイヌのことは若いときから見ていたので、自分がアイヌであることは分かったけれど、気にしていなかったと思う。

結婚についてそれぞれの年齢層をみると、壮年層で他の年代と比較して困難な経験が多少多いことが目につく。しかし、それ以外ほどの年代にも共通してみられることのほうが多い。

結婚の際に民族性を考慮した人たちと、しなかった人たちの両方があり、考慮したとする人たちの理由として共通なのが、血が濃くなるというものである。この場合の血とは、身体的な特徴、毛深さやホリの深さ、つまり見た目でアイヌと分かることがマイナスに作用すると考えていることである。また結婚の際にアイヌであることを伝えたとする者も、民族性を考慮した結果であるといいかえてよいだろう。後でわかって何か言われるよりも、結婚の前に伝えたほうがよいと、自分からあるいは親にすすめられ、伝えたという例がみられた。

「民族性を考慮した」に対して、「考慮しなかった」とする人たちの理由をみると、それは結婚に対する情熱が強かったといえるのではないだろうか。結婚したかった、相手が好きだったという、ごく自然な感情が民族性を考慮することに勝っていたといっってよいだろう。

これらの意識や経験は、前回の札幌やむかわの調査と大きな違いはみられず、むしろ同じ傾向であるといえる。結婚については年齢層が低いほど、困難な経験はみられないものの、結婚がアイヌであるという民族性を自分の内面で捉え直す契機になっている。いいかえれば、自らがアイヌ民族であることを認識し決断をしなければならないのが結婚であるといえよう。

また、各年代の部分ではふれなかったが、どの年代にも少なからずみられる経験があった。それは離別経験の多さである。現在の結婚が2度目、3度目であるというものだ。離婚の理由としては、相手が働かない、暴力を振るうなど結婚生活を維持するのが困難という理由が多くみられた。そこからは、対象者のこれまでの生活の困難性が推察された。なぜそのような経験が多いかについては、生活全体の状況や、ジェンダーに対する意識など関連する部分との深い考察が必要であり、今後深

い分析の必要を感じる。

第2項 次世代への意識

アイヌ民族として自らのルーツをどのように捉えるかについては温度差があった。また結婚に際しても、経験上の差があるものの、アイヌ民族であることに向き合わなければならない現実があったこともすでに確認した。とくに結婚相手がアイヌであるか否かを考える際に、その要因の一つとして大きかったのが、将来生まれる子どもの存在であった。

通常子育てに対して人々が抱く感情として考えられるのは、子どもを生む段階で生じる心配や期待と、子どもを育てる段階で生じる心配や期待である。

子どもを生む段階で生じる心配が多かったのは、子どもの血筋に関することである。とくに、毛深いなどの身体的特徴について気にかけている人が多くみられた。「子どもがほしい、子ども生みたいから、(アイヌは)嫌だなと思った。また毛深いの生まれるの」や、「やっぱり自分たちでもアイヌの血を濃くすると毛深くなったりとかっていうのがあって、嫌な…何か足だしたくないとか、何かそういうのってあるじゃないですか。…後略」などである。またそれら身体的特徴については、実際に子どもが生まれた後も心配なこととして続いていた。

さて、期待についてはどうだろう。子どもを育てる段階で生じるものに関しては、まず学歴に対する期待があった。自らが教育を受けることができなかったため、子どもには教育を受けてほしいと考えるものである。そのため、アイヌ民族が利用できる奨学金を利用したという人は多い。アイヌ協会に入会する際の理由として、高校や大学の奨学金を受けるためという理由も多い。そのように進学のための経済的な補填として、アイヌといういわば属性を利用しているといえるが、それを次世代にどのように伝えるかについては、むしろ消極的な印象を受ける。

自分の子どもにアイヌであることに誇りをもち生きてほしいと考えている人は決して多くはない。アイヌであることのアイデンティティをどう育てるかという考えをもっている人はごく少数であり、多くが自分の子どもには押し付けないとする考えである。多くの人がアイヌというよりも、和人と「おなじ人間である」ことを重視することが、アイヌであることを伝える意思を弱らせていると考えることができる。

しかし、そのような中でも、次世代に伝えたいという気持ちを強くもっている人もいる。「アイヌ同士で結婚して、子どもをもうけたって事は、この子をどうやって育てるか、アイヌとして恥じない、恥じないんだっていう風に仕向けられれば子どもも育ちやすいんじゃないかって。だから自分が、子どもが毛深いって言われたら、お父さんもお母さんも毛深いからね。だからお前はね、それでいいのって。言った友達悪くないの。お父さんも毛あるし、だから〇〇も毛があるのっていう風に自覚するように育てようねって」と、アイヌであることを、「恥じない」というプライドや、それを次の世代に伝えていこうとする意思がみられる。

表 1-12 子育てに関する考え

・(自分は高校行きたかったが行けなかった) だから子どもには高校だけは行かせましたね。頑張って。(老年) ・子どもが3人、3番目が1年でやめたけど、あとの2人は3年間。1か月3万5千円だと思うけど。子どもが学校に行くようになったら、何かいいことしたら変だけであれしたら協会でもってあれするからいいんじゃないのって。(老年) ・(自分は高校行きたかったが行けなかった)「だから何とかして子どもだけとは思ってたけど、子どもも子どもで私がそういうあれで学校行きたかったけど怪我でいけなかったから、あんた方は何もないんだからちゃんと学校いきなさいよって。それでも、もう行きたがらないで、高校も行かずに早く仕事についたほうがいいって息子も早々と。娘には和裁ならいささいよって。娘は中学で専門学校。(老年) ・成長とともに子どもも毛深くなってくるでしょうからちょっとは心配ですよね。(壮年) ・息子は眉毛のこととかすでに気にしているから、かわいそうだなと思うんです。去年ぐらいからですね。学校で息子が毛深いと言われるらしいんですよ。それを言われると、私がお母さんに責めたように責められるとちょっとね。なんとも言えないですね。(青年) ・ウタリ対策の奨学金はもらった。助かりました。アイヌでよかったと思って、それで。やっぱり高校入るとなったらそういうのも必要になるよってことを聞かされて。保存会は今子どもも入っています。孫も入ってる。全員入ってます。(老年) ・娘たちも、(アイヌ、アイヌじゃない) 全然私は気にしてません。(青年) ・子どもがほしい、子どもを生みたいから、(アイヌは) 嫌だなと思った。また毛深いの生まれるの。そうやって結婚して、その人、和人だと思って結婚したんやけん、混ざりだったの。だから今みたいに調べることもできない。(老年) ・夫婦でアイヌだし、やっぱり自分たちが何気にかう、いい思い出がなかったんだけど、やっぱりそれを分かってアイヌ同士で結婚して、子どももうけたってことは、この子をどうやって育てるか、アイヌとして恥じない、恥じないんだっていう風に仕向けられ子どもも育ちやすいんじゃないかって思って。だから自分が、子どもが毛深いって言われたら「お父さんもお母さんも毛深いからね。だからお前はね、それでいいのって。言った友達悪くないの。お父さんも毛あるし。だから〇〇も毛あるの」っていうふうに自覚させるように育てようねって。(壮年) ・やっぱりね、今こういうふうになって3人子どもいるけど、最初の子はやっぱり目鼻立ち整ってる。2番目はまったくシャモの人の子だから薄まってる。毛深さはあるんだけど、どの子もあるんだけど長男ほどでない。長男は本当に…やっぱり、顔が毛むくじゃらってわけじゃないんだけど、やっぱり目鼻立ち整っちゃってるから、やっぱり次男もちょっと毛深くなったから出てきてるけど、娘はまったくもってわかんないね。あれね。でもやっぱり毛深さからいったらね、長男が一番足のスネ毛とか見てたらやっぱり一番濃いね。細い割にはね。(壮年) ・(自分の子どもには) ここにいればそうなるだろうし。外に出ればわからないですよ。(手伝うかどうかは) 子ども次第。(壮年) ・息子には協会に入らせて強制はしませんよね。本人がしたかったらすればいいだけの話で。(壮年) ・父親も母親もアイヌでしょ。主人も父親も母親もアイヌでしょ。主人のお母さんってすごいきれいな人なんですけど、やっぱり自分たちでもアイヌの血を濃くすると毛深くなったりとかっていうのがあって、嫌な…何か足出したいとか、何かそういうのってあるじゃないですか。プールに入りたくないとか。それなのにわたしまた濃くしてしまってるんですよ息子に。中略…アイヌの人と一緒にならないほうがいいからね。生まれてくる子どもがかわいそうかなってことは2,3回言ったことあります、息子に。(壮年) ・(娘がアイヌ文化にふれるのは)やっぱりものを覚えるってことはよいことだから、別に私は何も言わないで。ただ普通にカマキリ踊ってよとか言ってる。やっぱりお母さんが病気だし、会話なくなるじゃないですか。そういうときに踊ってよとか言ってるって踊ってもらったりとかして。(壮年)

おわりに

本章ではアイヌの人々の家族形成について、生まれ育った家族と結婚によって新たに形成した家族という2つの家族の中で、アイヌであることをどのように捉え生活してきたかを、年齢層に注目しながら明らかにした。

自らが生まれ育った家族における経験は、これまでの調査結果と同様に年齢層が高いほうがアイヌ文化などにふれる経験が豊富であり、アイヌであることを自然と知ったというケースが多い。一方で若い世代では、子どもをもつまで、あるいは、アイヌ協会に所属するまで、自分のルーツに気が付かなかったという例もみられるなど、アイヌであることの認識に年代による違いがみられた。

また新しく家族を形成する際、つまり結婚については、年齢層による経験の違いは多少あるものの、どの年代においても結婚を契機にして、アイヌ民族であることと向き合う経験をしている。結婚相手がアイヌであるか否か、自らがアイヌであることを伝えるか否かなど、ある意味で選択を迫られる。なかには相手に対する思いが強いため、その選択をすることなく結婚した場合もみられるが、多くの者は決断をしたのち、結婚に至っている。

また自分の子どもをどのように育てたいかについては、アイヌ民族であることのマイナス面への心配が多くみられた。そのため、わが子にアイヌ民族であることを積極的に伝えていこうとする考えはごく少数であり、子どもが望めばという消極的な期待でしかない。つまりアイヌとしての文化や伝統あるいは誇りは、各個人の選択事項であり、子どもが望まなければそれを受け継ぐ機会は低いといえる。

本調査の対象地域である新ひだか町は、アイヌ民族の歴史のなかでも重要であり中心的な地域で

ある。アイヌの血筋でいえばこれまでのむかわや札幌の調査と比較すると、どの年代もアイヌの血筋を多く引き継いでいるという結果であった。それでも年齢層が若くなるほどアイヌの血筋が薄まっている事実は変わらない。新ひだかにおけるこの事実は、他の地域における結果以上に重く受けとめる必要があるだろう。

このようにアイヌの血筋や、アイヌとしての意識を次の世代にどうつなげていくのかは、混血が進む現状において重要な問題である。だがそれをどのように考えるのかは、個人的な問題でもあり難しい。一方で、次の世代へつなげるという視点に立てば、現在のようにアイヌ文化や人にふれる経験が少ない中では、よほど意識的に育てなければ、子ども自身がアイヌであると意識することも、それを引き継ぎたいと望む可能性も低いだろう。そういう意味でも、親がどのような意識を持ち次の世代につなげていくかこそが、重要なポイントであるといえるのではないだろうか。

注

- 1) 本章で用いたデータは、インタビュー調査の際、ICレコーダで記録したものをそのまま文字起こしたものを使用している。ただし、個人が特定されないよう表現を工夫している。
- 2) 1人だけ父親がアイヌであったかどうか確認できないケースがあった。
- 3) 1人だけ父親がアイヌであり、母親が不明というケースがあった。
- 4) 道内の他の地域におけるアイヌの人口比は1%前後であり、日高を除きもっとも高いのは宗谷支庁の2.2%である。日高支庁の9.2%という人口比は群を抜いて高い。

参考文献

- 小内透, 2012, 「調査報告のまとめ」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容——2009年北海道アイヌ民族生活実態調査報告書——』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 196-201.
- 北海道環境生活部, 2007, 『平成18年北海道アイヌ生活実態調査報告書』北海道環境生活部.

(品川ひろみ)